青髭２０

明宏訊

「しかし、ヴァロア殿？」
　改めてルイを眺めてみれば、こやつもアンリが知っている彼とだいぶちがう。おそらくは、彼らの体内に流れている青い血が、目の前の人物をただならない相手だとみなしているのかもしれない。何か、思い出したように、ギョイエンヌ家の二男は続ける。
　「･･･そういえばヴァロア家は、おい、ギョーム」
「そうですね、たしか、女傑の家系だと聞いています。たしか、なまじの男たちよりもよほど、女性の方が武力においても我らが主君、カルッカソンム伯爵家に命をささげてきた･･と」
「ギョーム殿は勉強家でいらっしゃる。わが祖母は青い血でもって大敵と戦いました。そのとき、夫君は娘を嫁がせた、領外の貴族の城に逃げ込んでいたのです。･･･ということで、ルイ殿、お相手仕る（つかまつる）が？いかが？」
　ギョイエンヌ従子爵家の男子のなかでもっとも知識を愛しているのが、ギョームである。ネアポリスやミラノの両古代文学から、昨今、ナルボンヌを席巻しているという流行文流文学まで、すべてにおいて精通したい、というのが夢である。
それゆえに、頭の中に書籍が舞ったとたんに、アネモーネに奪われた魂をすこしでも取り戻したのかもしれない。
　アンリは、しかし、いま、彼がすべきことは弟たちの心理を読むことではないはずだ。ナルボンヌを気遣って主君に無意味な行為をお諫めすることなのだ。もっとも、それは直截的に、ではなく、あくまでも、物語という叙述の間接的な手段を使って事実を人々によりよく消化させるような、オブラートを包まれた方法が好まれる。
　････まさか、主君は自分を学習させようとなさっておられるのだろうか？
　アンリは、はじめて伯爵の真意にすこしでも触れられたたような気がした。
「アネモーネ殿が余にとっていかなる人物なのか、それをそなたら兄に問うべきではないのか？」
　そもそも、エウロペ語の文法のなかで、余という一人称は、その場にいる人物でもっとも位が高い人間が使うべきものであって、あくまでも外形的ならともかく、本質的にはアンリが使うことは許されないはずだ。従子爵は、アネモーネの正体を知っているのだからなおさらだろう。
　だが、臣下の礼儀をあえて失しても、あえてそういう挙にでた。あきらかに、回りくどいやり方で殿は家臣にものを教えようとしているのだ、その正体はようとして不明だが。
　兄の言葉にまず反応したのは、ギョームである。彼は、兄の言いように、脳裏に常時舞っている書籍のなかの数冊ほどならば、完全に焼切ってしまったかもしれない。

「あ、兄上！こ、この方は、アネモーネ殿は兄上にとってどのような関係なのですか？まさか！？」
弟の疑問に対して、兄は、非常に卑怯ながら曖昧な言い方で応じる。
「余にふさわしくないと申すか？」

　加えて、わざとらしく兄の権威をかざす。そんなものは過去の逐電で絵に描いた餅と成り果てたはずだが、カルッカソンム伯爵が控えているからこそ、二人の無意識にそこはかとなく影響を与えるほどの強力な青い血が存在しているゆえに、アンリはそういう真似ができるのだ。ピエロのように滑稽な方法だが、たまにはいい。

「余、を名乗るアンリ従子爵が命ずる、ここは皆の者は引くがいい。アネモーネ殿よろしいな？」
「はい、アンリさま」
「・・・・・！？」
「アネモーネ殿！？」
　ギョームの美貌が絶望に歪み、栗色の長髪が宙を漂った。
　だが、しかし、アンリはそんなものに目を奪われるよりも、伯爵が示した、恋人や妻が愛おしい男性に示す礼儀作法、すなわち、地面に片足をついて、スカートを振り上げる、　もちろん、伯爵はそんなものを履いているわけがないが、魔法によって三人を騙しているのだ、そういう所作の方がよほど恐ろしかった。
　主従が転倒する。主君が自分をからかっているのだろうか？それともべつの意図が隠されているのだろうか？主君は自分に対して参謀役を望んでいるのだが、とてもその要求に応える方法をいまのアンリは知らない。
　この安っぽい演技ごっこにどのような意味があるのだろうか？ギョームはとうてい相談相手にはならないだろうし、ルイは、それ以前の段階で却下。たしかに、見ない間にそれなりの驚くばかりの成長は見て取れた。だからといって人間の本質がそう簡単に変わってしまうなどと、ありえないことだ。そういう意味もあるだろうが、能力の意味では必ずしもなく、あくまでも、向き、不向きの二項にカテゴライズされるべき問題だ。

アンリは、身体がふたつに割かれるような苦痛を味わった。いっそのこと、ナルボンヌの三流劇場で場末の歌手になった方がいいとさえ思うようになっていた。破れかぶれという言葉ほど、いまの彼を表現するのに適当な言い回しはないだろう。

　一方、完全に置いてきぼりを食らった、本来ならば、この舞台の主演クラスの演技を披露するはずだったルイは、この短期な男が殊勝にも内面の怒りを押し隠して、表現の隅々まで神経を行きわたらせて許可を兄に求めた。
「兄上、アネモーネ殿の申し出を了解してよろしいですか？」
　その件ならばすでに解答はでている。美しきアネモーネをみればわかることだ。
「青い血の貴族どうしがお互いに了としたものを無闇に否定はできまい」
「そ、その論理でいくならば、兄上、アネモーネ殿が私を受け入れるならば、了となさるのですか？」
「・・・・・」

「・・・・・」
　ルイは、悪いものでも胃に放り込んだような顔をしている。喉や消化器を通さずに、直接腹を裂いて食物を放り込んだような顔だ。
　アンリは、呆れる以前に驚愕していた。あの慎重で知的なギョームが、ゆくゆくは主君自分の相談役として適当だと将来を嘱望していた弟が、このようなじつに衝動的な発言・・・・いや、すでに行動に出ていた。
　長兄が口を動かす前に、「アネモーネ殿、ルイ・アントワーヌ・フロレル・レオン・ド・ギョイエンヌ、あなたさまに求婚いたします」
　正式な名前を、れっきとした貴族が口にするとき、それは求婚するときと爵位なり、王位なりを継承するときのみである。
　ここにいるすべての人がアネモーネの美しい唇を注視した。
「ならば、私とギョーム殿、二人が勝負してどちらが勝負するとして、どちらがクローバーの葉を手にするのか、それをアンリ殿と賭けなさい。もしも、あなたが勝利すればこの場であなたの妻になりましょう」
「二人がどちらに賭けたのか、私たちには知らせない、という前提つきですな。しかし、負けた方を賭けるというのは奇特なことで」
「違うのだ、ルイ、古代ミラノ時代は、クローバーは勝利の象徴であった」
　アンリが訂正した。騎士同士の勝負で、勝利は勝者にはアカンサスの花冠が与えられるが、敗者には慰留の目的でクローバーが与えられる。この植物には雪辱という意味がある。
　ところが、古代ミラノでは逆だったらしい。
　伯爵は、ルイやギョームを知らないはずだが、知の泉、という彼の属性を踏まえたうえでの発言なのだろう。そのような事情の観察に注視しているうちに、アンリは、自分も賭けの勝負のために、どちらが勝者なのか決定しなくてならないことを、忘却の川に流しさっていた。

「ギョーム・・・」
「あ、兄上・・」
　アンリとギョームの兄弟はお互いの顔を見合った。秀麗な顔がこれほど崩れたさまを幼児のころ以来、兄はみたことがなかった。そんな彼に羊皮紙を差し出す。すでに、紙の表面を焼いて彼が賭けるべき名前を記した。
伯爵とルイ、通常の戦いならば勝負は火を見るよりも明らかだろう。しかし、そこは制限されたうえでの主君の能力だ。青い血の貴族、四人の目をくらましたうえで、ナルボンヌに対して考慮しなければならない、それらの条件づけで剣を交わすのである。
　もしかしたら対等の勝負が期待できるのではないか？
　アンリの中で青い血が騒ぎだす。ルイほどでもないが、彼とて身体をそれが巡っているのだ。それを無理やりに押さえつけようとするナルボンヌ中央政府には反意を抑えきるのに苦労する。だが、主君の真意が反ナルボンヌにあることは明確だ。彼の深謀遠慮の一環に、自分のことも、そして、いまは、完全に言葉を失って立ち尽くしている、ギュスターブ・ペリゴールを含めた

パリ、ベルサイユの戦ごっこも、その一環に含まれるような気がしてならない。
　アンリは、アネモーネ・ド・ヴァロアと印字した。思わず、主君をしてしまうところだった。
　古くからの賭けの習わしで最初に書いた者が選択の優先権を得る。ということで、自動的にギョームはルイと書かねばならない。彼はたしかにあわてていた。能力の制御を誤って、羊皮紙を燃やしてしまうところだった。なんとか、アンリが冷静さを取り戻させて、ようやく灰になることを防ぐことができた。

　ところが、アンリの予想とは違って対等にはなりえなかったのである。なんとなれば、アネモーネは城内での勝負を求めたからだ。中庭に入ってしまえば、結界のなかゆえに、ナルボンヌの調査能力を妨げることができる。

　主君の確信に満ちた表情、アンリとギョーム、前者が勝利を得ることに自信があるとでもいうのだろうか？何故か、未熟極まりない自分の参謀が、古代ミラノの意味においてだが、クローバーを取得することを確信しているようだ。
恐ろしいことに、何から何まで見通している。

「ではこちらへ‥‥」
　ルイは、アネモーネを伴ってある場所に赴こうとする。アンリは、すぐに彼の考えを理解した。いちばん、広い中庭である。しかし、あそこには問題が鎮座していることを弟は理解しているだろうか？
ギョームはどうだ？
　嘆かわしいことだが、この白皙の美青年はアネモーネの臀部しか眼中にないようだ。おもいっきり肘鉄を弟の腰にくれてやる。
「ギョーム！」
「あ、兄上‥‥」
「しっかりしろ、それでもそなた、従子爵家の男なのか？それではアネモーネもいかにそなたが賭けに勝とうとも逃げていくだろうよ。そなたが得るのは求婚の権利にすぎないことを忘れるな」
　こうなったら破れかぶれという意識が従子爵家の若き継承者にはあった。だが、ひとつの不都合が発生していたことに気付いた。ギュスターブ・ペリゴールは姿を消した。ちちょうど、結界と結界の境である門をくぐろうとしたところだが、長い顔が見当たらなくなっていたのだ。
しばらく逡巡した結果、かなり背後で尻込みするギュスターブを視認することができた。彼はいなくては困るのである。なんとなれば、賭けの立会人に必要なのだ。厳密にいえば、アンリとギョームは立会人ではない。賭けと勝負は
二重になっている故に、いまひとり、青い血の持ち主が必要となる。
　ルイも、ギョームも、それを知っていて疑う余地もなかったのだろう。しかし、本人は違う。彼は、みずからがいやしい農奴であるとみなして疑わない。生まれてからずっと、そう教えられ

て育ったのだ。
よく考えてみれば、彼にとってアンリたちは雲上人にほかならない。彼らと並んで乗馬した。ふつうに考えればとうていありえないことだ。下馬するどころか、額が擦りむくほど地面に接吻して迎えねばならない。
　これまでのことは、彼にとって驚天動地続きにちがいないのだ。この辺で神経が焼切れても誰も非難しないだろう。
伯爵も、今日のところは、彼を厩にでも寝かせて、後のことは別個に考えるつもりだったにちがいない。それがこれほど面白い展開となってしまった。アンリは、哀れにも畏れかえって震える少年に命じざるを得ない。
「ギュスターブ、命令だ。付いてまいれ」